英語の時制と概念主体の事態認識について(1)

濱　田　英　人

0．はじめに

英語は時制として「現在時制」と「過去時制」の２つの形式をもつが、この形式が現実世界の「時」と必ずしも対応関係をもたないことはよく知られている。

(1) a. John lives in New York.
b. Water boils at 100 degrees Celsius.
c. James drinks and, what is worse, smokes.
d. Bill moves to his new house next week.
e. And then this big fellow comes up and says, “Hey, buster, you can’t walk about in here.”
f. Ford employee kills security guard at Michigan plant then shoots self.

(1)において、(1a)は「現在の状況」、(1b)は「普遍的な真理」、また、(1c)は「現在の習慣」をそれぞれ表わしており、この点では「時制」と現実世界の「時」は一致していると言える。しかし、(1d)では記述されているのは「確定した未来の出来事」であり、(1e)はいわゆる「劇的現在（dramatic present)」であるが、述べられているのは「過去の出来事」である。また、新聞の見出しなどに見られる(1f)のような表現も同様に「過去の出来事」を述べたものであるが現在

時制で表現され、言語表現としての時制と現実世界の時は一致していない。

また、このことは過去時制にも同様の現象が見られる。

(2) a. What was your name again?
b. If I were you, I would plant some trees around the house.
c. If I came into a fortune, I would give up working.
d. If you had been an engineer, you would have known what is wrong with this engine.
e. If you had come tomorrow instead of today, you wouldn't have found me at home.

(2)において、(2a)は一種の丁寧表現であるが、それが表わしている現実世界の「時」としては「現在」であり、(2b-e)は仮定法であるが、それぞれが表わしている「時」としては、(2b)と(2d)は現在、(2c)と(2e)は未来である。

小稿は認知文法の視点から、概念主体が記述対象となっている事態をどのように解釈しているかという問題として「時制」と現実世界の「時」の関係を捉え、時制の問題はそれが指示する「時」と直接対応関係をもつというよりはむしろ概念主体がある出来事を概念化する際に Vantage point や Ground をどこに置くかということによって決定されるとすることで最もよく説明できることを具体的な現象の分析を通して論じようとするものである。

1. Proximal/Distal Contrast in the Epistemic Sphere

認知文法では「現在時制」と「過去時制」の対立は認識領域の次元での遠(distal) と近 (proximal) の対立として扱われる (Langacker 1978、1991)。つまり、本来的には認識領域での遠近概念が時間軸に投影され、時間概念として理解されると考えるのである。

(3) a. Mary is pregnant.
b. Mary was pregnant.

従ってこのような視点から(3)を考えると、(3a)では記述対象となっている事態が概念主体にとって時間軸上 proximal として認識されているのに対して、(3b)ではその事態が distal として認識されていると捉え直すことができる。そして、このように時制が本来的に認識領域における遠近概念を表わすという捉え方はそれが時間関係以外の他の領域についても同様の視点から統一的に説明できるという点で妥当性をもつと言える。このことは次のような卑近な例で確認することができる。

(4) a. It may be that our team will win.
b. It might be that our team would win.
(5) a. I hope that you will give me some advice.
b. I hoped that you would give me some advice.

(4)では(4b)の *might* は(4a)の *may* に比べ概念主体が that 節の表わす事態の実現可能性（probability）に対して確信の度合が低いと考えていることを表わし、また、(5)では(5a)よりも(5b)のほうが丁寧さ（politeness）の度合が高いことを表わしている。そしてこのことは、前者の場合は可能性の尺度における遠近概念を表わし、後者では願望として that 節の事態を伝達する強さの度合という尺度における遠近概念をそれぞれ表わしていると考えることができる。また、このような視点からすれば次の(6)のような現象も自然に説明することが可能となる。

(6) a. I had hoped to have these walls repapered.
b. I hoped to have had these walls repapered.

つまり、expect、intend、hope、wish、promise など願望や意図を表わす動詞が(6a-b)のように過去完了相となったり、過去時制形に完了不定詞が後続している場合には「実現しなかった行為」を表わすことは周知のことである。そしてこのことは、願望や意図を過去時制ではなく過去完了相にすることで、あるいは不定詞節で述べられている事態を完了相で言語化することで、その事態が過去時制や単純不定詞で表現されるよりも更に distal な概念として捉えられ、概念主体や発話の時、場所を含めた概念であるグラウンド（G）から更に遠く切り離された概念として認識されているということが、その事態の非実現性(impossibility) を表わす結果となると原理的に説明することができるのである。

以下では、このような時制の捉え方が確かに妥当性を有するものであることを更にいくつかの言語現象を取り上げ、見ていくことにする。

2．概念主体と事態認識モデル

時制というものを認識領域における遠近概念の標識として捉える場合、まず概念主体と事態認識ということが問題となる。そこで、この節では認知文法において概念主体と記述対象である出来事との典型的な認知的関係を表わすものとして仮定されている「事態認知モデル」について概観しておく。

Langacker はこのような典型的な事態認知モデルとして(7)に定義づけられるように概念主体と事態との関係を観劇のメタファーで捉える Stage Model を提案している。

(7) **stage model**: A cognitive model which idealizes a fundamental aspect of our moment-to-moment experience, namely the observation of external events, each involving the interaction of participants within a setting.

(Langacker 1991: 553)

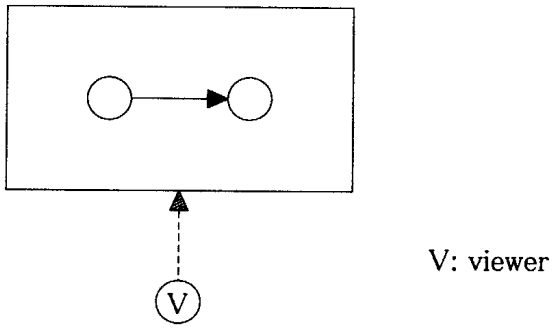


Figure 1

つまり、Figure 1 に示されるように、ステージ上で起こっている事態を概念主体が観客席から観察し、それを言語的に表現しているものとして両者の認知的関係を捉えるのである。そして、このような事態認知モデルは事態そのものに関与する概念と概念主体に係わる概念をうまく区別して説明できるという点でも妥当性をもつ。たとえば、このことは法助動詞の多義性を考えてみることで容易に理解できる。

法助動詞はそれが表わす意味として根源的意味（root meaning）と認識的意味 (epistemic meaning) に下位区分され、統語的にも異なった振る舞いをすることはよく知られている。たとえば、(8)に示されるように、根源的意味の場合には「完了形」や、例外的な場合を除き「進行形」と共起できないのに対して、認識的意味の場合にはそのような制約はない。

(8) a. *John may have kissed Mary. (root)
b. *John must be singing now. (root)
c. You must have left your umbrella on the bus. (epistemic)
d. Bob must be dreaming. (epistemic)

また、一般に否定辞がつくと根源的意味の場合には助動詞の意味が否定される読みと動詞の意味が否定される読みがあり曖昧(ambiguous)であるのに対して認識的意味の場合は動詞の意味が否定される読みしかもたない。

(9) a. You may not lock the door. (root)
= I don't permit you to lock the door.
= I permit you not to lock the door.

(10) a. Bill may not be working in his office. (epistemic)
= It is possible that Bill is not working in his office.

更に、根源的意味は疑問文に生じることができるのに対して、認識的意味は疑問と共起できない。

(11) a. May I come in? (root)
b. *Must John leave tomorrow? (epistemic)

また、一般に、能動文と受動文では根源的用法の場合には意味が異なるのに対して、認識的用法の場合にはそうではない。

(12) John may examine her. (root)
≠ She may be examined by John.

(13) John may have visited Mary. (epistemic)
= Mary may have been visited by John.

そして、このような根源的意味と認識的意味における統語的、意味的な違いは、Figure 2 に示されるように、概念主体と記述対象である事態がそれぞれ異なる概念領域にあることを明確に示すものであり、事態認知モデルによって根源的意味は事態の占める概念領域を、そして認識的意味は概念主体の占める概念領域をそれぞれ作用域とする概念であることをうまく説明することができるのである。[1]

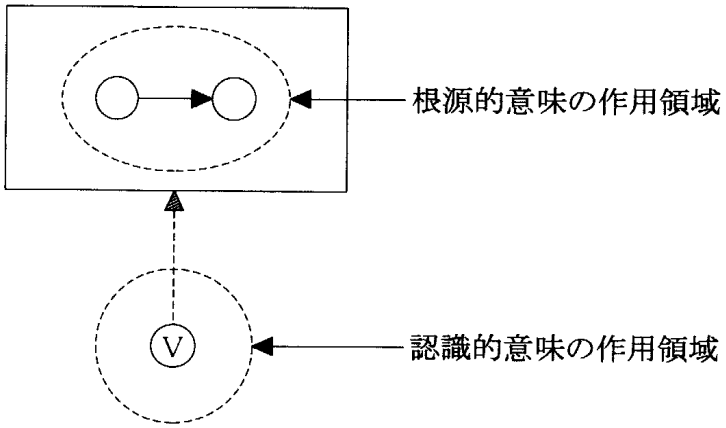


Figure 2

3．現在時制と事態の認知的距離

第1節で見たように現在時制はそれが表わす現実世界の「時」としては「現在」ばかりでなく、「過去」や「未来」の出来事を記述する場合にも用いられる。では時制が認識領域における遠近概念の標識であるとすると、そのような遠近認識はどのような認知的過程によって得られるのだろうか。認知文法では「意味」は概念化の過程に求められる。従って、表現の意味が概念主体である話者が記述対象となっている状況をどのように解釈しているかという問題に帰せられるとすると、ここで問題にしている遠近解釈を左右する要因は何か。この節では、概念主体が記述対象である過去あるいは未来の事態を proximal として認識するメカニズムについて考えてみる。

そこでまず、(14)のように現在時制が「確定した未来」を表わす場合について考えてみると、このことは次のような図で示すことができる。

(14) a. Mr. Brown retires at the end of the year.
b. The plane leaves for New York at 9:00 tonight.
c. The second semester begins at the first Monday of December.

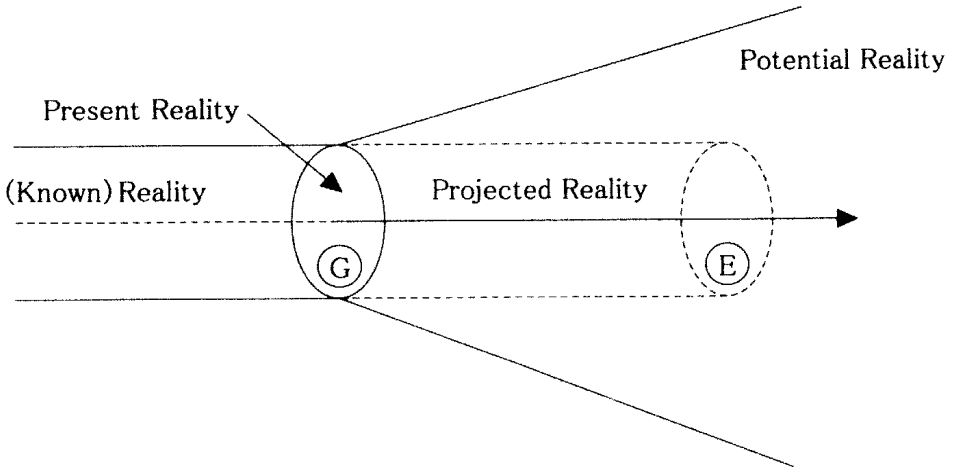


Figure 3　Dynamic Evolutionary Model

Langacker は法助動詞や時制辞などが表わす認知世界に関する事柄の把握の基底にあるものとして、時間の経過とともに過去から現在へと伸びていく円筒のような Dynamic Evolutionary Model を提案している。このモデルではGは概念主体と発話の時や場所を含む概念 (Ground) であり、それが位置している円筒の先端部分が現在の現実を表わしている。そして円筒の部分は過去の現実を、グラウンドよりも更に先に伸びている点線で示された円筒部分は現実をそのまま進展させた非現実世界を、また、点線の円筒の外側である Potential Reality はより離れたところに想定される非現実世界をそれぞれ表わしている。そこで確定した未来の出来事 (E) はそれが表わす「時」としては「未来時」であるにもかかわらず、なぜ現在時制で言語化されるのかを考えてみると、(14)の表現に示される状況を解釈(construe)し、それを言語化しようとする場合には、その出来事が副詞句によって示される特定の時点に実現する出来事として捉えられているため、Gから出来事Eまでの心的走査 (mental scanning) の過程の中に何のバリアーも認識されていないと考えることができる。従ってこのような場合、出来事Eは矢印で示された現在の現実に従って進展していく慣性の力によって到達される Projected Reality の中に存在することになり、心的走査という認知過程 (cognitive processing) によってGがEをその領域に取り込むことが可能となり、proximal として認識されると考えられる。

では、次の(15)のような過去の出来事が現在時制で言語化される場合、つまり「劇的現在(dramatic present)」についても同様に考えることができるのだろうか。

(15) a. The old man walks into the room, sits down on the sofa, and starts drinking.

b. She is now at another gate. She enters the wood, where it is already twilight, and at every step she takes the fear at her heart becomes colder. If he should not come.

結論的にはこの場合の記述対象の捉え方は「未来の出来事」が proximal として認識される場合とは異なっているように思われる。というのは概念主体が「過去の出来事」を発話時における現在との距離を測定することなく proximal と認識することが可能となるためには、「主体化（subjectification)」という認知過程が関与していると考えられるからである。[2] そこでまず初めに「客体的解釈(objective construal)」と「主体的解釈（subjective construal)」と「主体化」について簡単に触れておくと、Langacker（1991）は次のように述べている。

(16) The notions subjectivity and objectivity pertain to the construal relation between a conceptualizer and the conception he entertains. Full objectivity implies that a conception makes no reference to the conceptualizer, and since the relevant conceptualizers are the speech-act participants, the ground (G) is shown outside of the box representing the scope of predication.

Subjectification is a semantic shift or extension in which an entity originally construed objectively come to receive a more subjective construal. . . . Because G anchors one facet of the designated relationship, it is necessarily brought onstage as an unprofiled participant.

(Langacker 1991: 215-216)

そしてこのような解釈の違いは次のように図示することができる。

(a) Objectively-construed relation　　(b) Subjectificaton

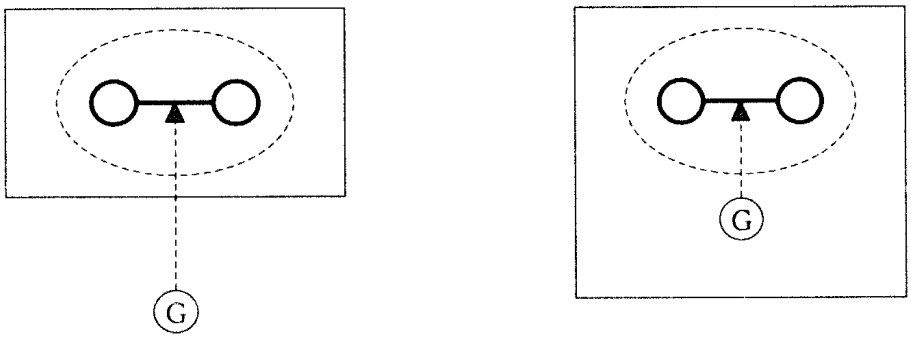


Figure 4

このことをより具体的に理解するために、次の2つの文の違いについて考えてみる。

(17) a. The balloon rose slowly.
　　 b. The hill gently rises from the bank of the river.

(17)において、(17a)は気球の物理的な移動を概念主体とは切り離して客体的に解釈し、言語化したものであると言える。それに対して(17b)は物理的に移動しているものはなく、この場合、移動しているのは話者の視点あるいは別の言い方をすればイメージの中の話者自身であると言うことができる。従って、このことから、Figure 4 (a) のように言語化される対象である出来事を概念主体から切り離して捉えている場合には概念主体は完全な観察者であり、言語化される出来事と概念主体との間に時間的なずれがある場合にはその時間的距離を測定し、言語化されるわけである。それに対して、Figure 4 (b) のように「主体化」が起こっている場合には、概念主体はステージ上の位置を占めているため、記述対象となる出来事と概念主体との間の時間的ずれはなくなってしまう。つまり、概念主体には出来事のと時間的な距離が認識されなくなるのである。従っ

て、このような場合、(17b)を例に取るとmental scanningは実質的、客観的時間とは独立し、それとは無関係に心的に組み立てられるのであり、(15)のように過去の出来事がproximalとして認識されるのは、まさにこのような認知過程によると言える。そしてこのような考え方の妥当性は、Informantによる判断では(18b)、(19b)が容認不可能であるという事実からも支持される。

(18) a. The old man walks into our room, sits down on the sofa, and starts drinking.

b. *The old man walks into our room, sits down on the sofa, and starts drinking last night.

(19) a. And then this big fellow comes up and says, "Hey, buster, you can't walk about in here."

b. *And then this big fellow comes up and says yesterday, "Hey, buster, you can't walk about in here."

つまり、記述されている事態は明かに現実の物理的世界では明確に過去の出来事であるが(18b)、(19b)に示されるように過去を表わす副詞と共起できないということは、概念主体がその出来事との認識的距離を認識していないことを示していると言えるからである。

4．条件文における動詞の形態と事態認識

条件文の動詞の形態は直説法となる場合と仮定法となる場合があり、このことは開放条件（open condition）と却下条件（rejected condition）としてよく知られている。この節では概念主体の事態認識の仕方と動詞の形態について考察し、どのように遠近概念がこの問題に関与しているかを見ていく。

そこでまず初めに、条件文の動詞が直説法となる場合と仮定法となる場合について具体的な例を挙げ考えてみる。

(20) a. My secretary's going to have a baby. — That's nice for her. — Yes, but if she's going to have a baby, I will have to do all the paperwork myself.

b. If it rains tomorrow, we may have to cancel the trip.

c. If you park your car here, it may be damaged by those playing children.

d. If he does not pay us soon, we will have to sue him.

e. If John is feeling better today, he may be allowed to leave the hospital.

(Declerck 1991: 425-429)

(20)は条件文内の動詞が直説法となっている。このような場合について Declerck (1991) は実現可能性が当然のこととして見なされている (its fulfillment is taken for granted) か、あるいはその実現可能性が確かではないが、十分可能性がある (not certain but quite possible) ということを表わしていると述べている。

これに対して、次の(21)のように条件文内の動詞が仮定法となる場合はその実現可能性が不可能ではないがありそうもない (unlikely but not impossible) か、あるいは(21)のように反事実的(counterfactual)であることを表わしている。

(21) a. If he took a taxi, he would have a better chance of getting there in time. (But I don't suppose he will take a taxi.)

b. If I came into a fortune, I would give up working. (But I don't really expect to come into a fortune.)

(22) a. I would tell you the answer to that question if I knew it.

b. If I had a computer, I could get on with my work much more quickly.

c. I wouldn't know all these things if I wasn't writing a dissertation on the subject.

そこで、このことから⑳のような場合に条件文内の動詞がなぜ直説法現在時制で表現されるかを考えてみると、それは次のように分析することができる。つまり、If が space builder（Fauconnier 1985）として機能し、心的空間が設定されその中である出来事を描写しそれを言語化する場合、概念主体がその出来事の実現可能性についていかなるバリアーも認識していない場合にはその出来事は概念主体にとって proximal として認識され直説法現在として言語化されるということである。

そこで、このことを先に Figure 3 で示した Dynamic Evolutionary Model を用いて考えてみると、直説法現在で表現される場合はその記述されている事態が状況的に誰かの発話の繰り返し（echo）であったり、その事態の実現可能性に対して何らバリアーを認識していない場合であるとすると、条件文で述べられている出来事が現在のことであればそのまま proximal として認識されると考えることができる。また、条件文が未来の出来事を表わしている場合には、Figure 3 の矢印によって示されている現在までの現実の進展に従って現在をそのまま押し進める慣性の力の働きを阻止するバリアーが存在しないため、先に第 3 節で述べた未来の出来事が現在時制で表現される場合と同様にその出来事は図の中の projected reality の中に位置づけられることになると仮定することができる。そしてこのことが space builder である If 節によって開かれた心的空間において、概念主体がその事態を proximal と認識させることを可能にしていると考えられる。

それに対して条件文内の動詞が仮定法過去によって表現されている場合には、それは概念主体の出来事の実現可能性に対する否定的な心的態度の表明であり、従って distal としての認識は発話時点において状況的に何らかのバリアーあるいは、実現可能性を下げる力が作用していることに起因すると考えることができる。そして、このような場合には現在までの現実進展に従って現在

をそのまま押し進める慣性の力を歪める力が加わることになり、その結果、点線の円筒の外側（Potential Reality）の領域に条件文で述べられている事態が位置するものとして認識されると仮定することができる。そして更に(22)のように現在の事柄を心的空間の中で dictal として認識するということは、そのような認識そのものによって、その述べられている事態が反事実的（counter-factual）として認識される結果となるのだと考えることができる。従って、このように考えてくると条件文内の動詞が現在時制となるか過去時制となるかは先に見た直説法現在／過去と何ら変わるものではなく、概念主体が記述対象である事態を proximal と認識しているか distal と認識しているかの違いであり、この認識の違いとして時制を統一的に捉えることが可能であると言える。

従ってこのように考えてくると、次の言語事実もより自然に説明することができる。

(23) a. If there had been general elections last year, Labour would probably have won. (past + past)

b. If you had been an engineer, you would have known what is wrong with this engine. (present + present)

c. If you had come tomorrow instead of today, you wouldn't have found me at home. (future + future)

d. If it hadn't been for Mary's help I could never have done it. (past + past)

e. If I had seen the accident myself I could have told you now who was responsible. (past + present)

f. If I had won at betting, I would have spent last summer in America. (past + past)

g. If I had won at betting, I would have gone to America next month. (past + future)

(Declerck 1991: 431-432)

つまり、(23)に示されるように条件節や帰結節が仮定法過去完了となっている場合でもそれが表わす現実世界の「時」としては過去、現在、未来のいずれも指し得るのであり、この場合、過去完了相は「実現可能性」という認識領域において過去時制よりも更に遠くに位置づけられる概念として認識されていることを表わしており、その結果、述べられている事態が反事実性をもつのである。

5．時制の一致について

最後に、本節では時制の一致（sequence of tenses）やその例外という現象をこれまで述べてきた proximal/distal という視点から考えてみる。

いわゆる「時制の一致」と呼ばれる現象は、たとえば(24b)のように主節の動詞が過去時制の場合に、補部の動詞の時制が主節の動詞のそれに一致して過去形となる現象を言う。

(24) a. John said, “Mary is pregnant.”
b. John said that Mary was pregnant.

この現象はすべての言語に普遍的に存在するというものではなく、日本語やロシア語等には見られないものであり、また、(25)に示されるように英語においてもすべての場合にこの「時制の一致」が補部の動詞に義務的に適用されるわけでもない。

(25) a. We found that John loves Mary.
b. Sally told me that John is very depressed.

これまで、この現象に関しては多くの研究があり、たとえば(26)に示されるように Kiparsky and Kiparsky（1971）は叙実的述語（factive predicate）の場合には時制の一致は任意的であるのに対して、非叙実的述語(non-factive pred-

icate）の場合には義務的であると述べている。

(26) The rule which changes a certain type of present tense into a past tense in an embedded sentence if the containing sentence is past, is obligatory in non-factives but optional in factives.

(Kiparsky and Kiparsky 1971: 359)

また、このことに関してはCosta (1972) でも同様の主張がなされており、次のような例をあげている。

(27) a. Bill forget (mentioned/regretted/realized/discovered/showed/noticed/was amazed/was concerned/said/reported) that coconuts grew/grow high up on trees.

b. Bill knew (was aware/thought/believed/imagined/figured/dreamed/wished/hoped/asserted/alleged/quipped/snored/whispered) that the new President of Chorea was/*is really a Chai CIA agent.

(Costa 1972: 46)

つまり、(27a) は叙実的述語と本来的には非叙実的ではあるが叙実的にも用いることのできる伝達動詞から成っているのに対して、(27b) は非叙実的述語、発話様態動詞、非叙実的で一種の様態を表わす伝達動詞から成っており、このことからも叙実対非叙実という対立がこの現象に深く関与していることが分かる。[3]

また、このことを踏まえて山岡（1997）は叙実的述語ではその補部は前提されており話者はその補文命題が真であると判断しているのに対して、非叙実的述語の補部は前提とはなっておらず、話者は補文命題が真であると断定（assert）しているにすぎないとし、動詞の補文は原則的には「主節時視点」をとり、時制の一致がおこり得るが、叙実的述語の補文の場合は話し手が発話時

において補文命題の成立を前提としており、このような場合には発話時への視点の移動が可能となり、その結果非過去時制への転換がおこり、補文の時制が現在時制となると述べている。[4]

更に、田中（1991）では時制の一致が起こっている場合は、補文の内容は文主語の視点で捉えられており、一方時制の一致が起こっていない場合は、補文の内容は話者の視点で捉えられているとし、時制の一致が義務的か任意的かに関して次の原理を立てている。

(28) 補文の中に話し手の視点が入り込める場合、つまり、that 節が断定的補文である場合は時制の照応は自由である。一方、補文に話し手の視点が入り込めないような場合、つまり、that 節が非断定的補文の場合には時制の照応は義務的である。

ここで、田中の主張は say の補文のように断定的補文の場合は時制の照応が自由である点で問題はないが、regret のような動詞の補文は前提された読み（presupposed reading）をもつため、話者の視点が入り込めない非断定的補文であり、時制の照応が義務的となると予測する点で、山岡の議論と対立してはいる。しかし、ここで注目してよいことは時制の照応が起こっていない場合はその補文の中に話者の視点が入り込んでおり、発話時視点となっているという点では共通しているということである。

確かにこの両氏の議論はこの現象の性質を捉えていると言えるが、時制の照応が義務的である場合についてはもう少し議論を精密化する必要があるように思われる。そこで、この議論を踏まえて、時制の照応現象がおこっている場合とそうでない場合について改めて考えみると、それはこれまでの時制の分析と同様に補文の事態を概念主体が distal あるいは proximal と認識していることに起因するものとして捉えることができる。

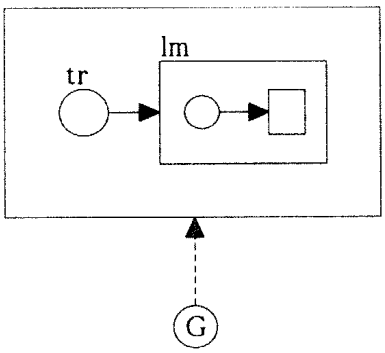


Figure 5

Figure 5 は時制の一致が起こっている場合の認知モデルであるが、この場合、概念主体がステージの外の領域から出来事全体を捉えていると考えることができる。なぜなら、この場合、出来事全体の primary figure である tr は主節の主語であるが、このような認識過程そのものの中にすでに概念主体の視点はこの関与体（participant）に向けられていることが示されており、このことは自動的に lm である補文の出来事が tr の視点から捉えられることを意味することになるからである。そして、このような場合には、Figure 5 の認知モデルから lm である補文の事態は tr にいわば anchor されている出来事であり、山岡（1997）で述べられている「主節時視点」という考察はこのような認知過程に起因すると言える。そして、概念主体がステージの領域にある主節の主語と述語によって表わされる上位節の事態を時間概念において distal と認識するば、それと等距離にある補文の事態も結果的に distal と認識されることになるのである。

それに対して、時制の一致が起こっていない場合というのは概念主体が主節で表現されている事態を distal として、また、補文で述べられている事態を proximal として認識していることに起因する現象とみることができる。この認知構造は Figure 6 のように示すことができる。

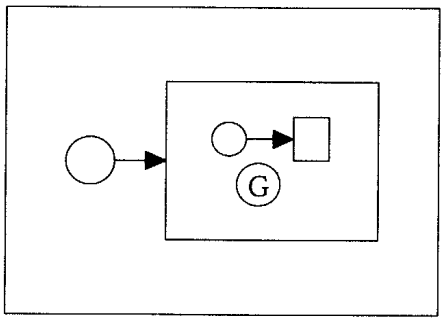


Figure 6

この図が意図していることは、概念主体が主体化（subjectification）されることによって補文事象の概念領域に位置しているということであり、このような認知過程によって、その補文事象が概念主体にとって proximal として認識されていることを示すことにある。[5] 従ってこの場合には概念主体は補文事象との認知的距離を認識しておらず、結果として現在時制となると考えることができる。このことは比喩的に言えば、移動している電車に乗っている状況に似ている。つまり、外から電車を見ている場合にはその移動を認識することができるが、電車の中にいる場合にはその中のものは物理的には移動しているが、その移動は認識されないのと同様である。また、このことは(29)のような名詞句補部の時制との関係を考えることによっても支持される。

(29) a. I met an American who spoke good Japanese.
b. I met an American who speaks good Japanese.

(29a)ではアメリカ人に会ったときに、その人が日本語を上手に話したということであり、アメリカ人の日本語のうまさは主節の規定する時間の枠内で捉えられているのに対して、(29b)ではアメリカ人の日本語のうまさは主節の規定する時間の枠を超えて、その人のもつ特性として述べられている（斎藤他(1995)：235)。つまり、関係節内の事態は時とともに変化するものとは認識されてはおらず、概念主体は主体化されることによってその事態を proximal と

して認識しているのである。

それに対して、主節の主語と述語によって表わされる上位節の事態は補文事象の領域からみるとその外にあると認識されるため、認知的に補文事象の領域に位置する概念主体はその事態との距離を測定するという認知操作が可能であり、その結果、その事態が distal として認識されればそれを示す標識(marker)である過去時制として言語化されるわけである。このことは、先の比喩で言えば移動中の電車の中のものはその移動は認識されなくても、車窓の風景や事物の移動は認識できることと似ている。

しかし、ここにはまだ未解決のまま残されている問題がある。それは(27b)や(30)から(32)に示されるように、Figure 6 のような主体化（subjectification）の現象が常に起こり得るわけではないということはどのように原理的に説明されるのだろうかという問題である。

(30) a. I thought you were a gentleman.
b. *I thought you don't like it.
(31) a. I hoped that Mary was American.
b. *I hoped that Mary is American.
(32) a. He expected that the college was destroyed by a bomb.
b. *He expected that the college is destroyed by a bomb.

このことに関しては山岡（1997）と田中（1991）で議論が対立していることはすでに見た。そこでこのことを改めて考えてみると、結論的にはこの問題は次の意味構造から原理的に説明することが可能であると考えられる。つまり、時制の一致現象が義務的に起こるのは典型的には先にも見たように主節の動詞が非叙実的述語の場合である。従って、このような補部の場合にはそれが表わす事態は主節主語の思考内容であり、主節主語の概念空間の中にのみ存在する概念である。言い換えれば、主節動詞が space builder（Fauconnier 1985）として機能し、それによって mental space が形成され、補文事象はその心的空間の

中に位置づけられるため、この補文の表わす事象に概念主体が直接アクセスすることができないのである。このことは Figure 7 のような意味構造として示すことができる。

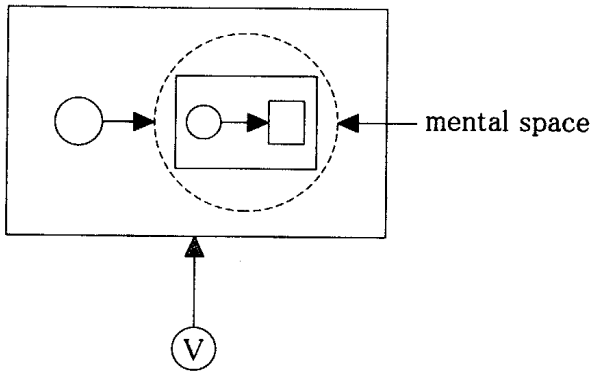


Figure 7

この図の点線の円は主節主語の概念空間を表わしており、それがいわばバリアーとなり、その結果、概念主体（V）は出来事全体を客体的に認識することのみが可能となると考えることができる。従って、このような認識過程では主節の出来事が概念主体にとって distal と認識されれば、同時にその補文事象も distal としてのみ認識されることになるのである。

更に付け加えると、(30)、(31)では主節主語が "I" と言語化されていることから、概念主体は自分自身を客体化して捉えていることが分かる。そしてこの場合、*thought* や *hoped* が space builder として機能しているため、やはり補文事象はそれによって形成された mental space 内に位置づけられていると言える。従って、概念主体は主節主語の認知的位置から補文事象を捉えることになるため、*thought* や *hoped* が distal な概念と認識されれば、それと同時に補文事象も distal として認識されるのである。また、このようは分析は次の文の容認可能性も正しく予測することができる。

(34) a. It was firmly believed that the frontal region is the seat of the

highest intellectual processes. (Jespersen 1949: 158)

b. They thought that prison conditions have improved.

(Quirk et al. 1985: 1027)

つまり、この場合は *It is firmly believed* や *They thought* という部分は一般論として補文事象を提示するものであり、*believe* や *think* は space builder として機能しているのではない。従ってこのことから概念主体が補文事象に直接アクセスすることが可能であり、(34)が容認可能となるのである。

5．まとめ

小稿では、「現在時制」「過去時制」という時制辞を認識領域における遠近概念の標識と捉える認知文法の仮定の妥当性をいくつかの言語現象から述べた。そして、概念主体と事態認識という視点から、概念主体が記述対象となっている事態をどのように捉えている場合にそれを proximal あるいは distal として認識するのかということについて認知文法の基本的な概念や仮定に基づき原理的に説明することを試み、時制辞が人間のもつ認識作用を反映するものであることを述べた。結論として、概念主体が事象を切り離して認識し、その事象が認識領域において distal として認識される場合には過去時制となること、また、事象が proximal として認識される場合には 2 通りあり、それはグラウンド (G) が事象を取り込むことによって proximal と認識される場合と、概念主体の vantage point やそれを含めたグラウンドが事象の領域に入り込むことによって proximal と認識される場合であることを主張した。これまでの議論の中には更に精密な分析を必要とするものもあることは確かであるが、このことについては今後の課題として考えたい。

注

1．このことはSweetser(1990)の分析とも一致する。Sweetserは認識的意味は根源的意味からの比喩的拡張であると主張し、Talmy（1988）のForce Dynamics（動力学）の視点を導入して、根源的な意味と認識的な意味は基本的には同一であり、違いは力あるいはバリアーが根源的意味の場合には主語に働くのに対して、認識的意味では話者の推論過程に働くという点にあると述べている。

2．ここでの分析は葛西（1998）に多く依っており、それを認知文法の枠組で捉え直したものである。葛西（1998：203）は次のように述べている。

(i) 時制はもともと表現しようとする事柄、叙述内容の認識とその表現の仕方にかかわるものであって、物理的な時間をそのまま表現したものではなく、表現しようとする内容をどう認識し、受けとめているかが問題となる。同じ時間的に過去の出来事であっても、それをすでに過ぎ去ったこととして認識し、そう表現すれば、過去時制となり、目の前におこっているようにありありと現在のこととして受けとめ表現すれば現在時制となる。「時制は話し手がある表現しようとする事態・事柄をどう認識し、受けとめているか、どう見て、どう表現したかが如実に示される」ものだと言える。

3．(27b)のknowの性質についてCosta（1970: 50、note 3）は次のように述べている。

(i) As in "I don't know that this is the right answer" = "I'm not sure that this is the right answer" I am grateful to J.R. Ross for pointing out to me that this fact correlates with the behavior of <u>know</u> with respect to certain movement rules, where <u>know</u> behaves only marginally as a factive.

また、Kiparsky and Kiparsky（1971: 348-349、notes）でも同様の主張が見られる。

(ii) Verbs like *know*, *realize*, though semantically factive, are syntactically non-factive, so that we cannot say **I know the fact that John is here*, **I know John's being here*, whereas the propositional constructions are acceptable: *I know him to be here*.

(iii) The following sentences can be given a non-factive interpretation.

I'm not aware that he has gone away.

I don't know that this isn't our car.

しかし、(iv)からも分かるように know は実際には時制の照応は任意的である。

(iv) a. The ancients thought that the sun moved round the earth; they did not know that it is the earth that moves round the sun.

(Jespersen 1949: 156)

b. I didn't know that our meating is next Tuesday.

(Quirk et al. 1985: 1027)

4．この主張は Enç（1987）でも同様であり、次のように述べている。

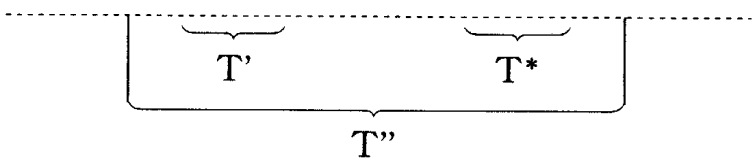
(i) a. John heard that Mary is pregnant.

b. We found out that John loves Mary.

c. Sally told me that John is very depressed.

The complements in these cases seem to express propositions that must be evaluated at the *original* time of eveluation, that is, speech time. In (ia) the time of Mary's pregnancy must include the speech time. Furthermore, it must also include the time at which the matrix is evaluated, that is, the time when John heard sbout it. The correct temporal relations can be represented as in (ii), where T* represents speech time, T' represents the time of John's hearing about Mary's pregnancy, and T" represents the time of Mary's pregnancy.

(ii)



(Enç 1987: 636-637)

5．ここで、時制の照応が起こっていない場合の認知モデル(Figure 6)についてより正確に言えば、補文事象の概念領域にあるのはグラウンド全体の場合とグラウンドの中の概念主体の場合の2通りの可能性があると考えられる。

References

Costa, R. 1972. "Sequence of Tenses in that-Clauses." *CLS*, 8, 41-51.

Deckerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo: Kaitakusha.

Enç, M. 1987. "Anchoring Conditions for Tense." *LI*, 18(4), 633-657.

_____ 1996. "Tense and Modality." Shalom Lappin. ed., *The handbook of Contemporary Semantic Theory*.

Jespersen, O. 1949. *Modern English Grammar on Historical Principles*. London: George Allen and Unwin.

葛西清蔵 1998.『心的態度の英語学』東京：リーベル出版.

Kiparsky and Kiparsky 1971. "Fact." Danny D. Steinberg and Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics*, 345-369. Cambridge: Cambridge University Press.

Langacker, R. 1978. "The Form and Meaning of the English Auxiliary." *Language* 54, 853-882.

_____ 1990. "Subjectification." *Cognitive Linguistics* 1-1, 5-38.

_____ 1991. *Foundations of Cognitive Grammar* Vol. 2. Stanford: Stanford University Press.

斎藤武生・原口庄輔・鈴木英一　1995.『英文法への誘い』東京：開拓社.

田中一彦　1991.「英語における時制の照応について」『英文學研究』67(2)、159-172.

Fauconnier, G.　1985.　*Mental Spaces: Aspects of Meaning Construction in Natural Language.*　Cambridge, Mass.: MIT Press.

山岡　洋　1997.「叙実性とその補文時制」『英文学論叢』(日本大学英文学会)、51-67.

Sweetser, E.　1990.　*From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural Aspects of Semantic Structure.*　Cambridge: Cambridge University Press.